

特集

注目のインメモリーシステム

高速屋

高速屋は、2002年に創業し、先代社長である創業者の新庄敏男氏が開発したメモリー型データ処理エンジン「高速機関5」を販売している。耕太郎社長は説明する。

実際は、1992年に新庄経営研究所を設立、高速データベースの開発に着手した。ベンチマークテストを重ね、大幅な性能向上とコスト面での優位性を確認して商用データベースとして完成した後に富士ソフトの出資を受けて会社を設立している。

高速化技術で特許

高速化は、「データを圧縮してデータ量を2分の1から3分の1に減らし、それを可能な限りのCPUの中のキャッシュ（一部メインメモリー）

JDBC/ODBCの標準APIに対応するなど高い操作性を持つ。数GBからTBを超える大量データを保有し、性能やコスト問題を抱えている顧客に「圧倒的なコストパフォーマンスのソリューションを提供できる」として

データ圧縮で高速化

BIとDWHの分野でも攻勢

これまで旅行代理店のエイチ・アイ・エス、スポーツ用品販売のアルペンなどが採用している。高速屋はこのほど、名古屋に本社を置くシステム開発のソフトテックと業務提携した。ソフトテックは、高速屋の販売代理店として高速機関5を販売し、合せてその技術を活用したシステムを開発して顧客に最適なシステムを提供する。

同時に、高速機関5の専門技術者を育成する。一方、高速屋は高速機関5による高速処理の技術を提供し、ソフトテックと共に顧客のシステム開発を支援する。高速屋はこれを機に今後、SIパートナー数社と組んで、市場開拓に取り組んでいく。分析系では、オンメモリーでのリアルタイム集計により、経営に役立つ情報を即座にフィードバックする。そのために、BIの分野でダイナトレックのBIツール「DynaTrack4」と連携し、複数のデータベースを仮想的DBとして統合し、これまで数時間かかっていた複数DBからの検索を数分で行えるようにした。今後は、大量データのリアルタイムデータ・ウェアハウス（DWH）の分野もねらう。

特徴は、従来型のリレーショナル型データベース（RDB）と比較して、数10倍から100倍高速に検索できること、DB構築時間がおよそ10倍以上速いこと、DBサイズが「数分の1」と小さいことである。